

祖母の死から考える

高山市立国府中学校 3年 石地 真帆

母とスーパーに買い物に行ったとき、家族6人で買い物にきた一家と出会いました。大人や小さい子供は軽々車を降りてお店に入ろうとしました。しかし、車にはまだ一人、車から地面までの20センチほどの段差に苦しみ、なかなか車から降りられないでいるおばあちゃんがいました。家族の中で手を貸す人はいませんでした。私はその光景をみて、迷わずそのおばあちゃんの所へ行き、手を貸しました。おばあちゃんは笑って「ありがとう」と言ってくれました。そのとき、私は亡くなった祖母のことを思い出しました。

祖母は、私が小さいときからずっとお世話をしてくれました。保育園や小学校、習い事に行くときには、必ず送り迎えをしてくれたとても優しい人でした。祖母は、私が大きくなるにつれて、体が小さくなり、何をやるにも動作がゆっくりとなってきました。そんな祖母に、私はこのまえのように、手を貸してあげたことがあったらどうか。あのおばあちゃんに会って、このことを考えるようになりました。考えても考えても、私は祖母にワガママばかり言って、すごく迷惑をかけたことしか出てきません。あんなに世話をかけたのに、何で祖母に何もしてあげなかったんだらうと、おばあちゃんが亡くなった今になって、悔やむことがあります。自分のことで忙しくて、祖母がだんだん弱々しくなっていて、助けを必要とするということに、あまり気がまわっていませんでした。

祖母は1月に最期の時をむかえました。その時は一緒にいることができました。それは私にとってもうれしいことでした。祖母もとてもうれしかったと思います。人が一生を終える時に、一緒にいることは、すごく大切なことだと思います。しかし昨年、信じられないニュースを耳にしました。親が死んでいることを隠して、不正に年金をもらっていたという事件です。祖母の死を体験した私には、考えもできないおそろしい事件でした。

普通、人が亡くなる時は、誰かがそばにいて、亡くなってからもその人の家族がお葬式などをあげて、ずっと大切にされていくはずなのに。昨年の事件では、亡くなっていることを知っていて隠す、寝たきりの高齢の方に食べるものを与えず見殺しにして、さらにそのことを隠しておいて、白骨になるまで放置するなど、耳を疑うようなことが、何件も何件もあったのです。その人たちの死をいたむどころか、偽って、年金まで受けとっていたのです。体の自由がきかなくなったから、世話がめんどうだからといって、何もしないという周りの人が増えてしまつては、安心して長生きすることができなくなります。私の祖母も体がだんだん思うように動かなくなってきたときに、「昔はもっとてきぱき

とできたのに…、おそくなってしまった」「まほをおぶっていたのに私の方が小さくなってしまって」とよく言っていました。

「お年寄りには優しくする」ということは、人間としてあたりまえのことです。お年寄りに優しくしなければならないという決まりがあるわけではありません。優しくする理由は、単に、体が不自由になっているからとか、高齢の方だからとか、何となくが理由になっていることが多いと思います。私は、そんな何となく理由で優しくするのではないと思います。私はお年寄りの方達には、私たちや、私たちの父さん、母さんを育ててくれたこと、そのおかげで今の自分たちがあることを、改めて考えなければならないと思います。小さい頃に守ってもらって、健康に成長してこれたという想いや、恩返しの想いで優しくしたいです。

自分の祖母が生きている間に、そのことに気付いて行動することができませんでした。心配してくれているのに、「また同じことを言っている」ぐらいにしか、きいていなかったことをとても後悔しています。これからはまだまだ元気な私の祖父から、スーパーなどで会うお年寄りの方達まで、すべての人に、感謝、「ありがとう」「今度は私が力になります」という気持ちをもって接しようと思いました。

祖母の死から考えたこと、「やっているようでしていなかった、感謝を伝えること」。祖母が残してくれた私への優しさを、周りの人に伝えて、子どもからお年寄りまで安心して生活できるように、自分の周りから行動を広げていきます。